

特別講演 村山 徹氏

新企画としては、昨年から試行的に行われていたアブストラクトのメールによる電子投稿の本格実施、ならびに、約100字の概要提出とWeb上での掲載が行われた。さまざまなトラブルも想定されたが、こうした電子メディアが相当に浸透しているせいか、ほとんど問題なくプログラムを組むことができた。このおかげで提出期限を1ヶ月引き伸ばすことができたのも、参加者や発表件数の多さに拍車をかけたのだろう。さらに今後はWeb上でのアブストラクトの閲覧やCDでの配布などが検討課題として挙げられるであろう。

小市民的であるが嬉しい企画として懇親会値下げへの挑戦や、Windowsプログラムによる発表タイマーの利用など、至る所に「新」という言葉が溢れる研究発表会であった。その精神を引き継ぎ、本ルポもこれまでのスタイルにこだわらず、筆者の独自の判断で小見出しをつけて書き綴ってみることにする。

2. CHANGE から CHANCE へ

冒頭で全体をまとめすぎたので、後を続けるのが難しくなってしまったが、平成16年3月17,18日の2日間にわたって早稲田大学理工学部（新宿区大久保）で春季研究発表会が開催された。初日は4月下旬のような陽気かと思いきや、2日目は冷たい雨と強風で、地方からの参加者は服装に苦労されたことだろう。

今回の特別テーマは「ニッポン再生、ORからの処方箋」と題され、3件の特別講演も一貫してこのテーマに沿って行われた。初日には白井克彦氏（早稲田大学総長）から「ニッポン再生における大学の役割」と題した講演が行われた。まずは、現在の多くの大学生が、インターネットなどを活用（借用？）しながら、レポート作成や試験対策を行っているなど身近な話題から始まった。早稲田大学においてさえも、いわゆる

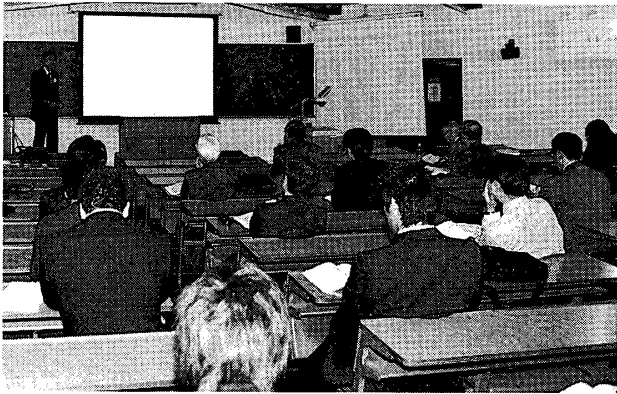


特別講演 北川正恭氏

理科離れや学力低下の傾向はあるという。そのような現状ではあっても、大学とは「志ある教師」と「何かを持つ学生」とが集う場であり、そこから大きな改革・創造・そして新たな知識の活用法として、早稲田大学は第二世紀宣言として「地球市民の育成」「独創的な先端研究への挑戦」「全学の生涯学習機関化」という3本柱を打ち立てる。この3本柱に則った早稲田構想（グランドデザイン）の壮大な企画の数々について紹介された。現在、ほとんどの国公立大学が独立行政法人化していく中、私学として自由奔放に活躍できる立場に対し、ある種の憧憬を抱かざるを得なかった。

続いて2日目には、村山徹氏（アクセンチュア社長）から「経営革新のさまざまな視点」と題した講演が行われた。村山氏の話は、豊富な経営コンサルティングの経験に基づき、株主・顧客・従業員などの意識、価値観、企業に期待するもの等が変化するということを認識することから始まる。そうした変化に対し、人的資源配分もできない企業あるいは業務には、当然の帰結として寿命があるという。村山氏の話はさらに続き、そうした変化に追随し、合致するように自分を変えるのではなく、自ら株主・顧客・従業員を選び、逆に株主・顧客・従業員の方を変えていくのだという発想の大転換を主張し、ここにニッポン再生の鍵があるという。さらに、企業と株主・顧客・従業員の間にある壁を破るための根拠付けには、コミュニケーションプログラムのような科学的処方箋がまたれると、OR学会への課題が提言された。

3件目は、北川正恭氏（新しい日本のつくる国民会議（21世紀臨調）代表、早稲田大学教授）から「マニフェストと内発的改革」と題した講演が行われた。北川氏については、現在の所属よりも、前三重県知事と紹介した方が想起される方も多いだろう。衆議院議



会場風景

員・文部政務次官・三重県知事と政治畑で活躍されてきた経験を元に、一貫して「生活者起点」を基本理念とした数々のエピソード…政治家としてオフレコの内容(?)も含む…はとても興味深く拝聴することができた。とにかく新しい改革を起こすためには「内発」が重要であると説く。そうしてミクロとマクロの両者の意思が合致して初めて世の中は大きく動くものだという。テレビなどで馴染みの顔でもあり、数々の政治活動の経験のなせる業か、話のうまさも手伝って、大きな存在感で聴衆を魅了した。

本ルポ筆者は3件の講演を拝聴しながら、「CHANGEからCHANCEへ」という標題をつけようと思った。実はこの言葉は、本ルポ筆者の知る某教授(残念ながらOR学会員ではない)の口癖であるが、本人の了解を得て借用させていただいた。このGとCには小さなTが落ちているだけだが、何が自分達にとってのTなのかを、それぞれの立場で考えてみるのも面白いだろう。

3. 時世ノ進運二資ス

冒頭でも触れたが、今回の研究発表会では13分野においてオーガナイズドセッションが設けられた。中には2セッション連続のオーガナイズドセッションもあり、全セッション数の4分の1に近い。その分野も多岐にわたっており、最先端理論中心の「鍾計画問題と相補性問題」(オーガナイザー:山下信雄氏、藤沢克樹氏)から、我々の実生活にとってもホットな話題である「食糧・環境問題とOR」(オーガナイザー:石井博昭氏)、そして新しい知の概念の導入を試みる「組織知能とOR」(オーガナイザー:六十里繁氏)など、あらためてORの守備範囲の広さに驚く。

オーガナイズドセッションのよさは、全体としてのまとまりがよいところにあると言えよう。特定のテ

マについて、様々な視点から議論できることは、発表をする側にとっても、聞く側にとっても得るところが多く、さながらミニシンポジウムのようなものもあった。例えば「鉄道のOR」(オーガナイザー:富井規雄氏、福村直登氏)などの会場では、これまで数理計画やグラフ・ネットワークの分野で見かけたような研究者の顔ぶれが想像以上に目立った。発表者も特定の所属の方に偏っておらず、多くの企業や大学での研究者がこのテーマに参画していた。問題解決のアプローチにも「古典的手法との比較」という切り口で行うなど斬新さが感じられた。そして、日本では航空機よりも鉄道や道路での輸送の方が身近な交通手段だからであろうか、質疑の内容も実体験に基づくようなものが多かったように思われた。このようにある特定のテーマに対し、様々な分野の専門家の参画、旧来の手法に捕われないアプローチ、そして素朴な疑問にも対応していく姿勢が、さらに研究内容やレベルを変えていくに違いないだろう。また、これまであまり顧みられなかったテーマにも脚光を浴びせるきっかけにもなっていくことだろう。

オーガナイズドセッションの他に特筆すべきことは、金融工学セッションが実に金融工学(1)から金融工学(7)まで、研究発表会期間中を通して1会場を独占し、発表件数も22件であった。それぞれの時勢においてテーマの流行はあるものの、全期間独占という例は見ることがない。金融工学も、近年はリアルオプションや価格評価というようなキーワードを持つ研究が集約的に増えてきてはいるものの、金融に絡む諸現象が対象であると捉えるならば、その研究領域は非常に広い。OR学会機関誌の表紙標題には「経営の科学」とある。それを考えると、ここが最もORの原点に忠実な分野なのかもしれない。また、村山徹氏が講演の中で「ニッポン再生のためには、企業と株主・顧客・従業員の間にある壁を破るための科学的処方箋が必要」とOR学会へ課題を提言されたが、その調合がこころあたりで行われるようになっていくのかもしれない。

特徴あるセッションを先に紹介してしまったので、他の魅力ある研究発表を「その他」と呼ぶには忍びないのだが、その他の興味深い発表としては、柳井浩氏の「双対定理の図解」では、Pappusの定理説明用小道具を準備され、パワーポイント一辺倒の発表会の中で手作りの温かみを感じた。柳井氏は同タイトルの発表を昭和60年(1985)秋にも行っている。当時のアブストラクト集を引っ張り出して、懐かしい感慨に耽



懇親会 森戸実行委員長挨拶

ってしまった。余談だが、前日行われたシンポジウムでも、手書きの図が意外にも好評だったと聞く。今日、情報発信技術は圧倒的に進歩しているが、我々の情報受信能力の方は、あまり進歩していないようだ。

池上敦子さんは、ナース・スケジューリング問題に関する精力的な活動および研究が評価され、このたび事例研究賞も受賞されたが、今回は少し視点を変えて「在宅介護ヘルパー・スケジューリングのための基礎的研究」の発表を行った。ナース・スケジューリングの時と同様、現場に飛び込んで体全身に問題を染み込ませる態度には、いつも頭が下がる思いがする。

春の研究発表会は、卒・修論の仕上がりにも影響されてか、学生の発表にも目を見張るものが多い。参加者450名という大記録を支えた背景には、学生が140名もいたということの特筆しておきたい。これらのうち、筆者が覗いたごくわずかししか紹介できないが、高橋健吾氏「最小費用流アルゴリズムを用いたタンク繰りスケジューリング構成法」、阿部英樹氏「ネットワークの頂点切断集合を用いた難燃化整備計画問題」、扇谷公輔氏「渋谷駅東口周辺地区における歩行者流動量」などは、最小費用流問題、最短路問題、グラフ理論などの基本的な手法を巧みに使い、現実的な問題に対して果敢にアプローチしていた。扱っている問題が身近であるためと、また学生相手であるせいも、質問やコメントも「あそこの歩道橋の階段は段差が高い」などと和やかな雰囲気溢れた。

懇親会も、値下げへの挑戦が功を奏してか、白井早稲田大学総長もお招きし、93名の参加者を得た。臨

時総会では会員数の伸び悩みという報告もあったが、白井氏は熱気溢れる会場を見渡して「そんな風には見えないなあ」。研究発表会および懇親会の参加者は、全会員数に対する割合でみれば、逆に高くなっているのかもしれない。開会の挨拶では、森戸晋実行委員長が、早稲田大学の校歌から「進取の精神、学の独立」のフレーズを歌い、教旨から「早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て学理を学理として研究すると共に之を実際に応用するの道を講し以て時世の進運に資せん事を期す」の言葉を紹介した。これは100年も前に大隈重信氏が主張したものであるが、ORの基本姿勢を端的に物語っているようにも思われる。そして今回の研究発表会では「時世の進運に資した」ような発表も多く、この教旨の精神が至る所に感じられた。早稲田大学教旨について興味がおありの方は次のHPをご覧ください。

<http://www.waseda.jp/top/index-j.html>

懇親会は和やかな雰囲気の中、次回の実行委員長である石川明彦氏（岩手大学）から開催の案内があった。早稲田が旧習にとらわれず、自由闊達に行ったことがかえって励みになったという主旨のことを語られた。山紫に水清き郷、仙台での再会を約束し、懇親会は30分繰り上げて終了し解散したが、早稲田から歌舞伎町へは歩いて近い。

4. 反逆者たち(?)

最終章に不穏な標題をつけてしまったが、学会の特別講演と時間帯を同じくして、学部3年生による4大学交流授業「問題発見とモデル化のプレゼンテーション」が行われた。東京工業大学（経営システム工学科）と筑波大学（社会工学類経営工学専攻）では、学部3年生に対し、自由にモデル化しプレゼンテーションを行う課題があり、吉瀬章子さん（筑波大学）が中心になって、両大学の交流授業を平成7年度より行ってきた。それに昨年度から慶應義塾大学（管理工学科）が、そして今回から早稲田大学（経営システム工学科）が参入し、4大学の学部3年生による交流授業が本研究発表会の場を借りて公開された。15件の発表があったが、レストランのシフト最適化、タバコの煙拡散モデル、競馬予想、ビール売上高の分析、人気ラーメン店の待ち行列モデルなど学生ならではの興味あるテーマでのプレゼンテーションが行われた。

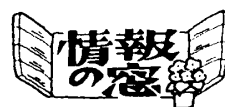
別会場の特別講演で北川正恭氏が「内発」の重要性を説いていた頃、実はOR学会において「内発」の動

きがあったわけである。研究発表会とは全く別の活動であったにもかかわらず、本来の発表会よりも大勢の人が集まり、研究発表会が終了してからもさらに1時間も議論が続き、外は冷たい雨の中、この部屋だけは熱気にあふれ、窓には白い露がついていた。そして当然のなりゆきとして懇親会も行われたようである。

世間で早稲田を形容する言葉には「進取の精神」

「在野精神」「反骨精神」「学の独立」などがよく知られている。今回の研究発表会にはそのような精神が感じられ、ニッポン再生とまでいくかどうかはわからないが、少なくとも学会再生には確かな手応えを感じた。最後に、素晴らしい研究発表会の場を盛り上げていただいた実行委員会のみなさまに、紙面を借りて感謝申し上げます。

第13回企業事例交流会ルポ



堀切 直美 (株)構造計画研究所)

去る2004年3月17日、日本オペレーションズ・リサーチ学会春季研究発表会初日午後、第13回企業事例交流会が開催され、30~40名の聴講者が集い、会場は熱気に包まれていた。

企業事例交流会の特長は、企業の実務家にOR手法を用いたプロジェクトを紹介していただく点である。発表後には、コメンテータによる解説、全聴講者との質疑応答が行われ、発表者、コメンテータ、聴講者から忌憚のない意見が飛び交い、ORをキーワードに、研究者と実務家をブリッジするに相応しい会である。

企業事例(1)セッションでは、相澤りえ子氏(構造計画研究所)を座長として、2件の発表が行われた。はじめに、山中啓之氏(NTTデータ)による、「データマイニングを用いたIDSログ情報のネットワーク監視業務への活用」と題した発表では、コンピュータへの不正アクセスを検知するIDS(侵入検知システム)より出力されるログデータを、統計手法、およびデータマイニング手法を用いることで、システム状態の把握をより迅速、簡単に行うことのできるフレームワークを提唱するプロジェクトが紹介された。この背景には、肉体的、精神的に負荷が大きくかかる管理者を補助するためのフレームワークとなれば、との目的があった。コメンテータの杉野隆氏(国士舘大学)からは、(1)IDSに対する関心度が高いとは言えない。関心を持つのはセキュリティに対して先進的なユーザーに限られている。(2)攻撃者の動きを全て自動的に判断することは不可能だが、管理者の負担を和らげるしきい値を設定できるのならば非常に効果が高い。(3)攻撃パターンの学習法が判明すると有益な情報となる、な



会場風景

どの情報セキュリティ分野における諸問題と、今後の展望に関してコメントがあった。なお、杉野氏からセキュリティのパフォーマンスに関する質問があり、データの検証は行ったが、実践に移すのはこれからである。また、聴講者からの、攻撃者のモデルと実際の損害を対応付けられればより効果的ではないか、との質問に対し、実損を調査しているグループとのコラボレーションを検討する必要がある、との回答があった。

続いて、松村みか氏(コーエイ総合研究所)による、「AHPを利用したマレーシア農村開発プロジェクトの参加型意思決定」と題した発表が行われた。

松村氏は、マレーシアのサバ州において、農村在住の女性の地位を向上させるための計画に対する調査に関して、AHPを用いたパイロット・プロジェクトの評価事例を紹介された。併せて、調査団による現地での活動内容も報告された。なお、選定方法として、現地での参加型手法による採点がキーとなった。AHP、およびANPの普及、発展に尽力されてきたコメンテ